

ユズの収量予測への取り組み



写真1 果実数をカウントした画像

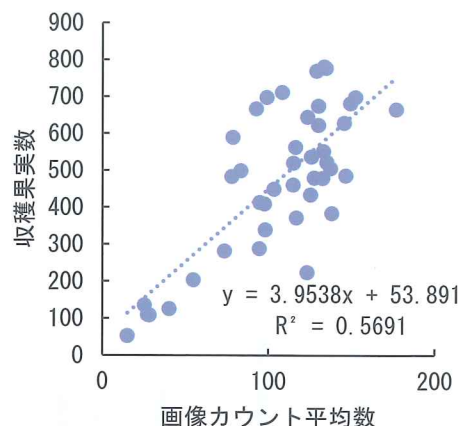


図1 着果数と画像中平均果実数との相関関係



写真2 樹体同士の間隔が狭い現地



写真3 ドローンで撮影した樹体

ユズの青果出荷量の70%を占める冬至用ユズは、収穫前にその年の作柄を基に価格を決定して相対取引をするため、出荷予測の情報が不可欠となっています。現在の出荷予測方法は、1樹の着果数をカウンターで数える手法で行われており、調査に多くの時間を要し、調査数が極めて限定的となります。そこで、果樹試験場では短時間で1樹当たりの着果数を計測する技術の開発を行っています。

昨年度は、1樹当たりの着果数を予測するために、10月中旬に1樹に対して4方向から写真撮影を行い、画像中のユズ

の果実数(写真1)と実際に収穫した果実数との相関関係を調査しました。その結果、画像中の平均果実数と収穫果実数には正の相関があることが分かりました(図1)。しかし、相関係数が0.75と低いことや、現地では樹体同士の間隔が狭いため(写真2)、4方向からの撮影は困難なことから、撮影手法を再検討する必要があります。

果樹試験場では今後、精度の高い収量予測方法を開発するために、ドローン(写真3)や広角レンズを使用した画像撮影を検討する予定です。

(果樹試験場 松島弘明 088-844-1120)